

## マンスリー・サンズ・トーク(61)

2013.12.1

木村 讀

### 谷中の本行寺

長久山本行寺は、月見寺と言い慣らわされている。谷中墓地の北、JR日暮里駅を見下ろす高台にあって、文人が月を愛でた寺、太田道灌の孫が江戸城内に建立し、のちここに移された由緒ある寺なのだ。



山門の扁額と両柱に、長久山、本行寺、月見寺と三色別々な色で書かれている。車寄せには自動車が止っており、墓地分譲の幟り旗もはためいて、すこぶる雑駁な門前なのだ。

### 山頭火の句碑がある

私が注目したのは、ここに東京で唯一、種田山頭火の句碑があることだった。



ほっと月がある 東京にいる 山頭火  
山頭火は漂泊の俳人、東京にはぴんと来ない。

でも、私は、山頭火が苦悩、苦衷を句に打ち付けているところに惹かれるのだった。

### 一茶の句碑もある

寺の境内には、一茶の句碑もあった。

陽炎や 道灌どこの 物見塚 一茶

このあたり、太田道灌が出城を作り、外敵を監視したのだ。一茶は信州から江戸へきて、上総、下総を巡って発句したようで、その頃、この寺の住職が一茶と親交を結び、一瓢と号し、句作をした。

世の中は 斯くの通りと 鳴く蛙 一瓢

世の中は 是程よいぞ 啼く蛙 一茶

実は私、8月に信州の松川溪谷の山田温泉にゆき、一茶と山頭火の句碑が同じところにあるのを見た。

春風に 猿もおや子の 湯治かな 一茶

つかれも悩みも あつい湯にどんぶり 山頭火

一茶は、すらっとした詠みっぷりと思うが、山頭火は、いかにも屈託ありげなのだ。

山頭火は、山口県防府の裕福な家に生まれ、東京に遊学したが、家が没落、熊本に逃れ、再度上京するも人生に追い詰められ、酒に溺れるようになった。41才にして雲水となり、各地をさすらい歩き、58才で生涯を閉じたのだった。

### たちばなの木

なるほどと感心して眺めていると、落ち葉掃きをしていた婦人が説明してくれた。「あそこの木はたちばなの木。きんかんじゃありません。」



橘は、京都御所紫宸殿に右近の橘、左近の桜と配され、不老不死の霊能を持つとされる。文化勲章のデザインにも使われている高貴な植物で、きんかんなんぞ、足元にも及びませんという有難い木なのだ。